

# NEWSLETTER

東京大学大学院人文社会系研究科

## 多分野交流プロジェクト 研究ニューズレター

2001 年 11 月 14 日

### 目次

#### 巻頭エッセイ

インターディシプリンよりマルチディシプリンな人材育成を.....上野千鶴子

#### プロジェクト案内

環境—その自然と人為—(2)：環境行動 (Ecological Behavior) を規定する  
心的過程について.....藪内 稔

80年代のアジア - 選択の果実.....井上あえか

ギリシャ・ローマ研究の方法.....逸身喜一郎

後記.....沼野 充義

# 34

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/>

巻頭エッセイ

# インターディシプリン よりマルチディシプリ ンな人材育成を 上野千鶴子(社会学)

多分野交流演習なるものが、文学部の目玉として鳴り物入りでスタートしたのが、1995年。わたしも1コマを持たせていただいたが、成果のほどはどうだろうか？

多分野交流演習がスタートしたとき、まさきに思ったのは、これは京大人文研方式の導入だ、ということである。桑原武夫さんがアイデアを思いつき、文部省を説得してしくみをつくり、人事と予算をつけた。戦後の社会科学の動きを、いちはやくもはや個人プレーの時代ではない、共同研究、それも分野のちがった研究者の集団によるゆるやかな座のような連係プレーの中で、お互いが刺激を受けながらひとつの成果をあげていく、というシステムを、「学際的研究」なんてしゃれた言葉がない時代から、思いつき、実践した。桑原さんは稀代のアイデアマンであり、そしてオルガナイザーだった。その中から『共同研究ルソー』のような成果も生まれた。

このしくみはまたたくうちに、多方面に波及した。人文研育ちの生態学者、梅棹忠夫さんは、同じ方式を自分が設立した国立民族学博物館に導入したし、同じく京都学派の影響を受けた梅原猛さんは、国立国際日本研究センターにもちこんだ。同じく人文研にいたことのある哲学者、鶴見俊輔さんは、似たようなやり方を民間で組織して『思想の科学』を刊行し、『共同研究 転向』のような成果をあげた。桑原さんや鶴見さんがつくった民間の研究団体、現代風俗研究会は、異なる分野の集う座のおもしろさを体現したものである。メンバーのなかには人形作家や美容師などもおり、そのなかから「たこやき評論家」まで誕生した。

人文研方式は東にも波及した。国立歴史民俗博物館も、同じような学際的なプロジェクト方式を導入している。多分野交流演習がスタートすると聞いたとき、そうか、東大もその気になったのか、と思ったものである。と

ころが実体を知ってがっかりした。人事と予算はなるほどついていたが、申し訳程度のおそまつなもの。国立大学教官をお呼びする場合には、非常勤手当はつかず、私立大学の場合にも規定通りの微々たる額である。そのうえ、首都圏以外からどなたかに来ていただきたくとも、旅費もつかない。これではメンバーになっていただきたい方たちにお声のかけようもなく、三拝九拝して無理をおねがいするか、声をかけやすい身近な方におちついてしまいがちである。大学院生の参加を正式に認め、単位認定の対象にしたのはいいが、これも博士課程後期の学生に限られている。(編集部注) 大学院生を前期と後期でそんなに差別する理由がわからないし、現に諸先生方は修士課程の学生にも「単位にならないけれど、出るといいよ」と、声をかけておられるはずだ。「学際」をいうなら、いっそ「学校際」にもすればよい。他大学の院生も自由に出入りし、単位交換の対象になればかれらにもインセンティブになるだろう。少なくとも、非常勤でお呼びしている方々の勤務していらっしゃる大学の院生諸君が、受講して単位になる程度の制度の裏づけは整備するべきではないだろうか。

多分野交流演習は、その気になれば使える制度だし、成果があがることも過去の経験から実証されている。だが、制度を支えるインフラがあまりに貧弱だ。当研究科で最大の成果といえば、法文二号館中2階の荒廃した1室が、多分野交流演習室として装いもあらたにヴァージョンアップしたことだろうか。担当の教員にとっては、日常の業務に加えて負担増になり、これでは担当者、関係者のすべてにとって、さまざまな負担をかかえながらもその場を共有することがメリットになるという、よほど魅力的なプログラムを組まなければ維持するのがむずかしい。魅力的なプログラムは、魅力的な人材によって支えられる。

あの人を呼びたい、というときに旅費も出ないようでは、おのずと選択の範囲は限られる。魅力的な人材は、首都圏にばかりいるとは限らない。そのなかでも、多分野交流演習の非常勤講師枠に、評論家やフリーランスのジャーナリストなど、アカデミック以外の人材が登場し、教授会で認定されたことは、ひとつのブレイク・スルーではないだろうか。新しい異種混交的な知は、かならずしもアカデミック・コミュニティから生まれるとは限らないからだ。

ところで多分野交流演習が登場したとき、もうひとつ思ったことは、なぁーんだ、多分野交流なんてとっくの昔からひとりで行っていた、という感慨である。もちろん、わたしの専攻が社会学という、あらゆる隣接分野から貪欲に知の道具を盗む、なりふりかまわぬ成り上がりの学問であることも関係しているが、いまだき知のリストラのなかで、ひとつのディシプリンに安住していられるような分野はどこにもないはずだ。わたしは20代のころはひたすら人類学の民族誌と精神医学の病跡誌とを読んでいたし、社会学の論文を読むより経済学の論文を読む方がおもしろかった。30代にはいつてから80年代の文学批評理論の隆盛に遭遇し、文学理論から多くを学んだ。80年代に文学研究は理論漬けになり、理論を欠いた文学研究は成り立たなくなったが、同時に他の社会科学の分野でも、言語論、記号学、文学理論の影響を抜きにディシプリンを語ることはむずかしくなった。90年代には歴史研究にのめりこんでいったが、歴史学もまた民俗学、人類学、文学研究からの影響を強く受けており、「史料が読める」だけでは歴史記述はじゅうぶんでなくなっていた。そして「女性史」という講壇史学のなかでは正統性を持たない分野で、90年代につぎつぎに多産な仕事を生んでいったのは、いっぽうで「史料の読み方がなっていない」と歴史家に批判

を受けながらも、歴史学のディシプリンのなかでは育ってこなかった人材、教育学や社会学の若手の研究者だった。わたしは毎年、テーマを変えて「アイデンティティの政治」や「＜近代家族＞再考」、「ナショナリズムと女性」、「不払い労働の理論」などのゼミをおこなってきているが、年間60本を数える指定文献リストには、言語学、心理学、人類学、歴史学、文学、精神医学等々の分野の論文が並び、社会学プロパーの論文は少ないくらいだ。いわば総合講座をひとりオムニバスでやっているようなものだ。受講生は通年でそれだけの学際的なアプローチに接するから、社会学が社会学だけで閉じない分野であることをおのずと学ぶことになる。こういうときほど、社会学というディシプリンが、境界の定まらない、いいかげんな学問であることに感謝することはない。

そうなれば東京大学の三極構想、すなわち駒場キャンパスは「学際性」を、本郷キャンパスは「ディシプリン性」を、柏キャンパスは「新領域」を、という知の分業体制もいかなものか。ディシプリンは伝統芸能や無形文化財のように生き延びれるわけではない。時代とともに、知のリストラはいやおうなく進行するし、たとえ一部のひとびとにとって不愉快でも、ジェンダー研究のような新しいアプローチもはや「分野」とは呼ぶまい

が登場し、老舗の学問に斬り込んでノイズを発しつつけるのも、時代の趨勢というものだろう。ディシプリンもまた変容する。老舗としての本郷が、ディシプリン性にたてこもっているうちに、すっかり時代に取り残されていることにもなりかねない。

多分野交流演習が誕生したのは歓迎だ。できればそれに実質を与えるだけのインフラがともなってほしいし、成果がかたちになってあらわれてほしい。そして何より、異なる分野の研究者たちがたがいに刺激を与えあう現

場に立ち会って、インターディシプリンというよりもマルチディシプリンな人材が、受講生のあいだから育ってほしい。それがいちばんの成果、というべきではないだろうか。

（編集部注）

多分野交流演習は、2000年度より、博士課程だけでなく、修士（博士前期）課程の大学院生の履修・単位取得も認められるようになりました。



プロジェクト案内

# 環境—その自然と 人為—(2)

主査 松永 澄夫

木曜5・6時限

環境行動(Ecological Behavior)を規定する  
心的過程について

文・藪内 稔

(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

問題：人々は日常の生活において、環境に配慮した一般的行動（環境保全・環境保護に何らかの点で寄与すると考えられる行為全般）（ecological behavior）をどのように行っているのだろうか。またそのような行動を動機付ける態度・行動意図（behavioral intention）は、どのような背景、状況、知識、あるいはコンテキストによって形成されるのだろうか。また、環境行動に人々を志向させる要因としての責任感（情）は、どのような倫理観・道徳観に基づいているのだろうか。今回は、このような環境・社会心理学的課題に関わるごく最近のスイスにおける先行研究と、私の担当する社会心理学研究室での実験実習で得られた東大生を対象とした探索的研究とを比較検討をおこない、話題提供をした。

背景となる理論・モデル：環境に対して人々が抱く態度（environmental attitude）と環境行動をつなぐ心的過程を説明するモデルとして、社会心理学における『合理的行為・計画的行為理論』（Fishbein&Ajzen）を援用し、また、個としての責任感（moral responsibility feeling）と社会的慣習に依拠した責任感（conventional responsibility feeling）のいずれが環境行動を強く導くところの要因となり得るかを検討した。合理的行為論によれば、＜当該行為を行うことによって生じられる結果についてどう認識しているか＞（これは当該行為に関わる知識に規定される）という側面と、＜当該行為についての規範的認識＞（これは行為対象に対する価値

意識に規定される)によって行動意図が形成され、オバートな行動が喚起されることになる。

結果：スイスでの研究 被調査者はスイスの環境保護を目的とした組織に属する輸送運転手と待遇改善を目的とした組織に属する運転手。構造方程式モデルで環境態度と環境行動の causal relationship を解析した結果、合理的行動モデルは、環境行動を適切に説明するものであること、すなわち、環境に対する知識、共同社会における自己の生活に関する規範的態度が環境行動の確率的生起を高め、また对人的調整的・社会慣習的規範の側面ではなく、自己の行為責任にいかに対峙するかという側面での責任感(情)が環境行動に強く関わることを示された。 社会心理学研究室での研究 スイス研究との対比研究という位置づけはできないが、東大生を被調査者とした結果は、合理的行動理論はかならずしも環境行動を説明するモデルとはなりえないこと、とりわけ、環境に対する知識のレベルが必ずしも環境行動の確率的生起に結びつかないことを示し、社会慣習的責任感(情)のほうが環境行動を強く規定している傾向を示した。

このような両研究における相違を呈示し話題を提供した。

プロジェクト案内  
**80年代のアジア -  
選択の果実**  
主査 桜井由躬雄  
木曜5・6時限  
文・客員助教授  
井上あえか

本講座は、今年度は半期講座として開講され、9月末に終了した。それと同時にアジア各国の60年代から80年代をテーマとしてきた3年間のシリーズが終了したので、この機会を借りて全体の総括を試みることにしたい。

冷戦の終結によって始まったのは、安定、平和、あるいは発展の時代かと思われた。しかし90年は、株の乱高下、経済不安の時代であり、さらに21世紀に入った今年、アメリカ貿易センタービルのテロがさらに不安な時代の本格的な幕開けを告げた。事件後間をおかずにアメリカが打ち出した報復論は、今だからこそ成り立ち得た政策なのではなかろうか。60年代ならアメリカに反対する声は世界各地にもっと多く強く存在したし、70年代も80年代も、アメリカ自身がもっと国際法なり、国際社会の規範に束縛されていた。これにたいして現在は、冷戦によって維持された政治的規制や、それに依拠して可能となった規範や一定の方向性が失われ、アメリカの恣意的な方針が世界の基準になり、正義にさえなる時代である。

冷戦終結後の今日から見て、冷戦期にはどのような特徴があったのか、ここでは三点指摘しておきたい。第一に、60年代から80年代にはアジアには進むべき道の選択肢が三つあった。外国の資金に依存した自由主義（資本主義）経済か、あるいは社会主義経済か、それともそれらのいずれにも与しない孤立主義（閉鎖）経済かである。これらの選択肢のうちのいずれを選択したかによって、東、東南、南アジアの各国の歩む道は大きく異なっていくことになった。第二に、冷戦は世界に秩序をもたらし、政治的安定を保証していた。軍備拡大競争があった一方で、冷戦が戦争を抑止していたという事実には異を唱えるものはいないであろう。第三に、この時代は政治原則に規定されて経済が動いていた。

資本主義を選んだ国にとって、輸出市場と

なったのはほとんどアメリカであった。一方で社会主義を選ぶ国があった60年代には、社会主義は豊かさをもたらすという希望がまだあった。社会主義も共産主義も、イデオロギーとしての説得力を持っていた。資本主義をえらぶか社会主義をえらぶかは、恐らく植民地期の状況に大きく規定されたであろう。植民地期に地主層、あるいはすでに資本家層が存在した国はアメリカ的な経済へ、逆に自給的・小農的アジアは社会主義への道を進んだと考えられないだろうか。そして選択の契機として、植民地独立運動あるいは革命があったのである。革命とはたとえばインドネシアの9.30事件、あるいはベトナム戦争である。

1970年代末まで、社会主義あるいは社会主義の資本主義的改革としての社会民主主義は、アジア諸国にとって進むべき方向としての意味を維持していた。実際には65年半ばからすでに社会主義の構造的解体はすでに始まっていたという見方もできるが、解体が現実化、実体化してくるのは70年代の半ば以降である。社会主義的豊かさは貧困へと転落していった。この時期に、社会主義経済圏では生産財が行き渡り、生産の中心が消費財へ移行した。しかし消費財は生産財と違って、気まぐれな消費者の要求に適應する必要がある、小回りのきかない計画経済にはなじまなかった。そのことが、70年代に社会主義的豊かさと貧困への転落が背中合わせであったひとつの理由であったといえないだろうか。そして80年代半ば以降、社会主義に見切りをつけるように、ソビエト連邦でペレストロイカ、ベトナムでドイモイが始まる。こうして社会主義への幻想が壊れたとき、次に現れたのは資本主義への幻想だった。資本主義への幻想と誤解に基づいて、海外からの投資が来ることを期待して、元社会主義諸国は国を開放した。

1985年から90年代にかけては、オルタナテ

ィブ喪失の時代といえる。社会主義を捨てて資本主義へ移行しようとした国々は、外国からの投資が期待したようには集まらず90年代に資本主義の現実を認識する。しかしソ連の消滅と同時にオルタナティブがなくなり、否応なくアメリカ中心の市場化経済へ編入されていくことになった。そしてアジアの資本主義経済が頓挫するのが97年のアジア通貨危機であった。

21世紀に入った現在、世界はいよいよオルタナティブのない、規制のないことの不安定さに満ちている。そこに現れてきたのが、一つのオルタナティブとしてのイスラーム復興主義であろう。あるいは環境論、精神論などもその中に数えられるかもしれない。反アメリカと表裏の関係にあるイスラーム復興主義も、環境論も、精神論も、物質主義へのアンチテーゼであり、精神的な価値の再生を求めている。

このように考えてくると、1980年代は20世紀にとって、あるいは近代にとって、大きな転換点であったと考えられる。マルクス主義もケインズ主義も、ともに社会の問題を国家の介入によって解決しようとしたという点で、同じ源の二つの処方箋であったといえる。1980年代にはこの処方箋がともに力を失った。規制緩和あるいは民営化と称して、国家が社会の問題から手を引いていく時代であり、それに代わって市場万能、自由主義万能の原理が世界を支配し始めたのであった。こうした状況への批判として、反グローバリズムやイスラーム復興主義を位置づけることは可能である。しかし、それらは新たな処方箋を提示できていない。そしてアメリカが主導する論理に対抗することを宣言しているのはテロリズムの論理だけというのが今の世界の実態なのではなからうか。

米同時多発テロによって明らかに世界は変わった。しかしそれ以後も、日本ではなぜか

そうした議論が深まらない。深まらないままに対テロ法案が拙速に国会を通過する。革新の崩壊によって、反対者が不在となった社会に、さらに追い打ちをかけるこの日本人の鈍感さは、致命的でさえある。

世界はポスト資本主義の処方箋を求めている。セーフティーネット論はそのひとつかもしれない。それはかつての福祉国家論に似ている。これに対して、日本の規制緩和と構造改革はまさに国家が社会の問題から撤退していく過程の始まりであるが、社会関係が崩壊したところですべてを個人の問題に還元し自己責任を問う将来像は、あまりに荒涼としている。

プロジェクト案内

# 古代ギリシャ・ローマ 研究の方法

主査 逸身喜一郎

金曜5・6時限

イントロの第0回を除き、4月から10月の前半まですでに4回のセッションが終わっている。このNLでは、第1回から第3回までの報告の要旨を報告者にそれぞれまとめてもらった。

第1回 5月25日 (逸身喜一郎)

「教訓詩とは何なのか」

「なぜ？」という問いは文学研究には無縁である。文学研究は「なぜ？」ではない。「いかに？」なのである。「悲劇とは何か？」よりも「この行のこの単語の意味であり、それがその文中に本来ありうべきかの是非」である。いっぽう歴史にはいくつも「なぜ？」がある。「なぜ？」という問いが歴史とかがわりあうとすれば、哲学とかがわる問いは「とは何か？」であろうか。

しかしそうはいうものの文学研究にあっても「なぜ？」「とは何か？」を発したい局面がある。ある作品、作品群があまりに今日の常識とかけはなれている場合である。いわゆる「教訓詩」とよばれるジャンル「とは何か？」「なぜ？」このような題材がヘクサメトロスでかかれねばならなかったのか。ただしあえていままでの私の考察と折り合いをつければ「教訓詩とは何か。なぜこうしたジャンルが古典文学の伝統の中で脈々と続いたのか」という問いは、文学史の問いである。(「教訓詩の紹介は省略。)

エポスを「英雄叙事詩」「教訓詩」「牧歌」に分けるのは、セルウィウスの記述を踏まえた分類であり今日の常識になっているけれども、本当のところどうなのか。「教訓詩」と「英雄叙事詩」との境界線は、遠くから見るとはっきりしているにもかかわらず、越境は多いし境界も時に曖昧になる。詩人たちは「英雄叙事詩」とか「教訓詩」といったサブグループからなるジャンルの境界を自覚的に越境しようと試みたというよりも、むしろ彼らの中

ではエポスはエポスということしかなかった。何より「教訓詩」をしたためた詩人たちの意識は、自分たちがホメーロス以来の伝統によるということにある。(具体例省略。)

## 第2回 6月22日 (神崎 繁) 「哲学的「中傷」—その類型と変遷—」

幸福な家庭に共通の単調さに比して、不幸な家庭にはそれぞれそれぞれおもむきを異にするというロシアの小説に倣って言えば、人を褒める表現は単調だが、悪口となると人は、古来、随分と工夫を凝らしたもののようである。例えば、2世紀の文法家・ポルックスにそのような「悪口(psogos)」の用例一覧があり、社会的な出自、容貌・身体的特徴、服装・趣味、職業、性格、性的性向、精神状態、友人・師弟関係、政治的立場など、実に多様な側面に涉っている。

だが、そのような日常的な「悪口」から発展して、五世紀頃には喜劇作家やソフィストを中心に、弁論術の技術的洗練を受けた「中傷(diabole)」という、「顕彰(enkomia)」と並ぶ一種のジャンルが形成されるまでになる。その影響は、ヘラクレイトスが、ヘシオドスやピュタゴラス、クセンノファネスなどの知者たちを「多識(polymathie)」と呼び、また、懐疑論者ピュロンの随行者ティモンが、今度は当のヘラクレイトスを「謎かけ人(ainiktes)」またゼノンを「両様に語る者(amphoteroglossos)」(「飛ぶ矢は止まっている」と、それぞれ綽名を付けたことに窺われる。

そのなかにあって、「皮肉、空とぼけ(eironeia)」蛇、「痺れエイ」「シレノスの容貌をした」といったソクラテスへの中傷を逆手に取って、議論好き、真理への愛求(エロース)といった積極的評価に転化させたプラトンの力業には、注目すべきものがある。というのも、ここには容貌が性格を、性格が

行動を、行動がその人の本質をとという形で、しかも、それが価値の逆転をともなって表現されているからである。このような手法には、「無分別」を「勇氣」「思慮深さ」や「沈着さ」を「臆病」や「怯懦」と呼んだというツキジデスの『戦史』における「内乱」の記述に通うものがあり、実際プラトンは、『国家』で「国制」の墮落を記述する際にも、このような後の修辞家によって「逆転(paradiastole)」と分類される手法を用いている。

発表は、主題の面白さと意気込みのわりには空回りに終わったが、少なくとも報告者当人にとっては、今後展開すべき課題を得た点で収穫があった。

## 第3回 7月13日 (櫻井万里子) 「アテナイ人は戦後復興期をどのように生きたか」

ペロポネソス戦争以後にギリシアは衰退への道を辿り始める、というかつての通説に対し、最近では戦後のアテナイが戦争以前よりもより成熟した民主政を営む安定した社会形成へ向かった、とする見方の方が優勢である。ところが、どちらの見解を妥当とするにせよ、戦争直後のアテナイの政治的、社会的動静については、これまで十分な検討が加えられてきたとは言い難い。本報告は、比較的研究が手薄なこの時期におけるアテナイの歴史像を再構成する試みである。

ペロポネソス戦争で敗北したアテナイでは、スパルタの傀儡政権(いわゆる「三十人僭主」)が誕生し、続いてこの政権を支える寡頭派とこれに反対する民主派とのあいだに内戦が勃発して、数ヶ月後に両派の和解が成立するという目まぐるしく、ドラマティックな一年が続いた。今回は、とりあえずこの和解後の民主政復活から前386年の「大王の平和」によってコリントス戦争が終結するまで

に時期を限定して報告を行なった。アテナイ社会は敗戦による経済的なダメージよりも、内戦の際に生じた市民間の相互不信が深い傷跡として残り、他方で、5世紀の後半以降に次第に市民の間に浸透し始めた貨幣経済の威力が、戦後の政治的な指導者トラシュブロスやコノンの行動にも大きな影を投げかけたことを論証した。

## 後記

多分野交流プロジェクトが正式に発足し、今のような形の演習が行われるようになって今年で 7 年目になります。その間、多くの先生方の努力により、このプロジェクトは地道ながらも順調に活動が続けてきました。その蓄積と成果はすでに様々な刊行物の形で実を結んでいますし、たとえいまだに無形のままではあっても、若い大学院生に与えてきた刺激には測り知れないものがあります。しかし、それにもかかわらず、多分野交流演習は、なんだか相変わらず正規のカリキュラムに対する物好きな「おまけ」程度の地位を脱していないようにも思われます。なんてもったいない。ドラスティックな構造改革の荒波に立ち向かおうとする今、これだけの可能性をもった器を有効に使わない手はありません。いまこそ、これまでの多分野交流プロジェクトの意義や成果を再確認し、今後のさらなる発展の可能性を探る潮時なのではないでしょうか。そのためにも、今号の巻頭エッセイにいただいた上野千鶴子先生の文章は重要な指摘をいくつも含んでいると考えます。

最近、前任の責任者・岸本美緒先生がこれまでのプロジェクト主査・参加者からの意見を集め、整理されました。その内容をここで少しご紹介させていただくと、成果に関する肯定的な評価としては、以下のようなものがあります。

- 学生、若手研究者の視野を広げるのに役立っている。
- 他分野を意識して発表するという共通理解が学生・教官を含む参加者に行き渡っており、裨益するところが大きい。
- 従来の学問の枠組みを超える新しい試みとして、大学外部からも評価されている。
- 機構改革を伴わない柔軟な共同研究の組織として大学内にアピールしている。
- しかし、その一方で問題点もないわけではありません。たとえば、以下のような

指摘があります。

- 文学部全体にどれほどの刺激を与えているかは不明。
- 学生の積極的な参加をいかに促進させるか。参加学生は多いが、履修者は少ない。
- 成果公開にあたっては、商業ベースにのせた出版が困難。
- こうした演習を積極的に推進する環境・カリキュラムが整っていない。
- 運用面でも様々な具体的な問題や制約がある。

ここで、初心に立ち返る意味で、多分野交流プロジェクトが正式に発足した時、『多分野交流ニュースレター』第1号(1995年4月5日)に藤本強学部長が書かれた言葉を引用させていただきます。

「このプロジェクトは、本研究科がその長い研究の歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果をもとにしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系学問に新たな活力を与えようとするものである。そうした試みは、従来もさまざまな場でなされてきたとはいえ、研究教育機関が本腰をいれて取り組む例は、けっして多くはない。21世紀にむけて、人文・社会系学問にたいして示される期待、要請の大きさを自覚し、このプロジェクトがゆたかな成果を収められるよう努力を続けたいと考えている。

.....に、このプロジェクトの特徴のひとつとして、たんに研究者が協同するばかりではなく、同時に大学院における教育の場としても構想され、組織される点をあげねばならない。大学院学生が、先輩研究者と自由に討議することで、博士論文の執筆や学問的視野の拡大に資することができるはずである。」

この言葉に述べられた理念が7年後のすでに21世紀に入ったいま、どれほど実現されているか。そして、それを今後どのように発展させられるのか。それは文学部(人文社会系研究科)の未来そのものに直結する問題だ、と言えるのではないのでしょうか。

(ワーキンググループ責任者 沼野充義)

「多分野交流ニューズレター」  
第 34 号

平成 13 年 11 月 14 日発行  
東京大学大学院人文社会系研究科  
多分野交流プロジェクト研究  
ワーキンググループ事務局発行  
責任者 沼野 充義  
TEL: 03-5841-3846

連絡先 情報メディア室  
TEL: 03-5841-3880  
FAX: 03-5841-8949

Edited by  
Kaori Domae  
Noboru Koshizuka

BIT-DESIGN